2021 年 11 月 1 日

お客さま 各位

栃 木 信 用 金 庫

2022 年版「田中 一村」カレンダー作成について

栃木信用金庫（栃木市万町 9 番 28 号）では、栃木市出身の画家「田中 一村」の作品を採用したカレンダーを 2020 年版から作成しております。

2022 年版カレンダーは、一村様式の特徴である近景クローズアップ効果が最もよく発揮された代表作「不喰芋と蘇鐵」を採用し、11 月 1 日（月）より当庫本支店窓口にて配布しております。

当金庫は、これからも“地域で一番信頼される金融機関”を目指して、地域の魅力・情報を発信してまいります。

記

１．作品について

本カレンダーの作品「不喰芋と蘇鐵」は、奄美の自然を愛し、鋭い観察と画力で、奄美大島の植物という精霊の持つ濃密な生命力や自然の偉大さを描いた渾身の作品です

２．配布について

カレンダーをご希望のお客さまには、どなたさまにも、広く配布させていただきますので、お気軽に最寄りの本支店窓口までお申し出いただきますようお願い申し上げます。

尚、数に限りがありますので、なくなり次第、配布終了とさせていただきます。

以上

栃木信用金庫

＜参　考＞

1. 田中一村（1908 年～1977 年）について

田中一村（たなかいっそん　1908－1977）は、栃木県下都賀郡栃木町（現・栃木市）に 6 人兄弟の長男として生まれました。父は彫刻家の田中稲村（本名は彌吉）、一村（本名は孝）は若くして南画に才能を発揮し「神童」と呼ばれました。６歳の春に一家は栃木から上京、７歳の時に児童画展で天皇賞（文部大臣賞とも）を受賞、父から「米邨」の画号を与えられました。

18 歳で東京美術学校（現在の東京藝術大学）日本画科に入学、同期に東山魁夷、加藤栄三、橋本明治らがいました。しかし 2 ヶ月で退学、理由は学校の指導方針への不満や父の病気により南画を描いて生計を支えなければならなかったからと考えられます。『大正 15 年度版全国美術家名鑑』に「田中米邨」の名が載るほど有名になっていました。

23 歳の時、「自分の将来行くべき画道をはっきり自覚し」と南画を脱却しましたが支持者の支持は得られませんでした。30 歳の時に一家は千葉市千葉寺町に転居、約 20 年間周りの自然や風物のスケッチを行い、新しい絵画への道を模索しました。

昭和 22 年、一村 39 歳の時に川端龍子主宰の第 19 回青龍社展で「白い花」が入選しました。

翌年、田中一村の名で第 20 回青龍社展に「秋晴」「波」を出品、「波」は入選しましたが「秋晴」の落選に納得できず「波」の入選を辞退、その後日展や院展でも落選。47 歳の時、九州、四国、紀州を旅し、50 歳で奄美大島に移住しました。

54 歳の時に「5 年働いて 3 年間描き、2 年働いて個展の費用をつくり、千葉で個展を開く」という画業 10 年計画を立て、紬工場で染色工として働きました。その計画通り 59 歳の時に工場を辞めて制作に打ち込み「アダンの海辺」などの代表作を作り、2 年後に紬工場で働き 64 歳で辞めて制作を再開、68 歳の時に倒れ 1 週間入院、体調を何度も崩しながら、生涯独身で孤高の画家として制作を続け 69 歳の一生を終えました。一村は出生地の栃木市にある田中家の菩提寺の満福寺で永眠しています。

2. 作品「不喰芋と蘇鐵」について

1973 年（一村 65 歳）以前の代表作。晩年の一村が執念を燃やして納得いくまで描き、「閻魔大王への土産品」と述べたもうひとつの作品。サトイモ科の不喰芋の葉が画面いっぱいに広がり、発芽から枯れるまでの不喰芋と、画面右の黄色い蘇鐵の雄花、左下のオレンジ色の雌花、そして右下のハマナタマメの花と実がひしめくように群生し、人間の生老病死の一生と子孫繁栄を願う生命サイクルが表現されています。また、中央のわずかな隙間には、沖合に浮かぶ小島で神が最初に降り立つ「立神（たちがみ）」を望む画面空間を配し、奄美大島の植物という精霊の持つ濃密な生命力や自然の偉大さが祝福されているように感じられます。

※不喰芋…クワズイモはサトイモ科クワズイモ属の常緑性多年草で、見た目はサトイモに似ているが食べられないのでそう呼ばれている。観葉植物としても栽培されており、葉の長さは 60cm にもなる。沖縄県や奄美群島では道路の側や家の庭先などあちこちで自生しています。